

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2016年 9月 80号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com

http://keaf-japan.com

高校教員や銀行員として活躍

社会に巣立った元 KEAF 奨学生

池内 秀樹

KEAF 奨学金を受けた生徒たちが卒業してカンボジア社会の中でどのように活動しているのか。首都プノンペンだけでなく、KEAF 支援の対象となっているプレイベン州の農村地帯も近年、急速に変わりつつあるため、それを調査することは容易ではありません。各高校側も卒業生たちの動向をきちんと把握していないのが現状ですが、大学生を対象にした奨学生だけは、毎年、プノンペンで奨学金を手渡す作業をしているので、事情をつかんでいます。そこで、今回6月の面接では、現役の大学奨学生と卒業して社会で活躍している元 KEAF 奨学生に集まってもらい（下の写真、プノンペンのホテルで）、話を聞くことができました。

大学奨学生の第1号は2012年王立プノンペン大学化学教員コースを卒業し、さらに2年間の教員養成コースを終えて、タイ国境に接するバットアンバン州のバットアンバン高校で生物・化学を教えているレン・サイ君(28)（下の集合写真の1部を拡大した右の写真3人の真中）。前日午後7時バットアンバン発プノンペン行きの夜行バスで早朝に着き、その足でわれわれの宿舎となったホテルに来てくれた。この日は1泊し、明朝7時のバスで帰るという。

「生まれ育ったプレイベン州で高校教員になりたかったのですが、当時、同州での新規教員の枠は5人し



カンボジアとベトナム

「歴史と今」を歩く旅

KEAF シニアツアー募集

2017年1月中～下旬

最後の10頁をご覧ください

がなく、空いていたバットアンバンに赴任しました」「そのころは、6、7年勤めたら、プレイベン州の高校に異動させてもらうことを希望していましたが、今はバットアンバンの下宿先で知り合った小学校の教員と結婚し、教員の仕事の合い間に畑の農作業をしながら暮らしています。故郷に帰るつもりはありません」。



バットアンバン高校は生徒数約700人。担任の学級は40人だったが、学期が終わると27人ぐらいに減ってしまうという。タイ国境に近いこと、畑作中心の農村部であるため、出稼ぎや農作業の手伝いで定期的に欠席したりして、最終的には中退してしまう生徒が多い。そういうことで、出身校のプロモルプロムに比べると、学習の意欲はやや低いのが現状だが、「そういう生徒たちのなかには、がんばっている子もいて、私はここで教員としてやりがいを感じています」と言葉を選びつつ、落ち着いた様子で話を結んだ。

もうひとり教員志望の元奨学生がいる。リム・セーラさん（向かって左）。2014年、王立プノンペン大学のクメール語科を優秀な成績で卒業し、1年間の教員養成コースを終えて、さらに実習生として先生になるための研修を続けている。「奨学金を受け取ることができ、やっとここまで来ました。私が先生になれるなんて冗談か夢のようです」。しかし、年500ドルのKEAF奨学金だけでは大学生活を維持できず、パートタイムでさまざまな仕事を経験したという。（3頁へ続く）

卒業できるのは半数以下

貧しい農村の中・高校の現実

高層ビルが立ち並ぶ首都には活気

村田 知寿子

奨学生を決める面接と支援物資を届けるために、岡宮さん、池内さんとカンボジアに行ってきました。カンボジアを訪れるのは2回目で、今回は今年2月のKEAF 企画の「カンボジア・ベトナム・シニアツアー」でした。6月のカンボジアは雨期で、私たちの滞在中もほぼ毎日大雨が降りましたが、一定時間降ると止み、大半は晴れていました。最初の3日間はプノンペンに滞在しました。支援物資の調達と大学奨学生の面接の合間にプノンペン市内を色々と見ることができました。

プノンペン市内には近代的な商業ビル、ホテル、コンドミニウム、ショッピングセンターがありますが、一方で大きな穴のある道路、信号のない交差点、整理されていない送電線を見るとインフラの整備はまだままだようです。2015年の経済成長率7%、物価上昇率3%（世界銀行）。プノンペン中から活気が感じられます（下の写真は、プノンペンの高層ビルに取り囲まれた王宮）。

4日目からは奨学生の面接、支援物資を届けるためにプノンペンから国道1号線をベトナム方向に向かって移動しました。最初に訪問したのはスヴァイリエン州のアンサー小学校とチョーティアル中学校。支援物資を渡しました。

私の今回訪問の主なミッションは児童、生徒数の調査でした。案内役のソワンさんに協力していただき、訪問した全学校の各学年の人数を把握することができました。その調査で分かったことで、最初に訪問した2校は最高学年が最小学年の人数のほぼ半分になっている。毎年同じ数が入学するわけではありませんが、多くの子供たちが退学していつているようです。

午後からはプレイヴェン州のプラティアート中学・高校で面接を行いました。この学校には日本の企業の寄付で建てられた校舎が2棟ありました（注：同校の旧校舎は19



94年KEAFが寄贈)。この学校の生徒数は7年生219人、9年生100人になっています。10年生は62人です。

5日目午前中はバンティチャクライ中学校に行きました。英語教師から要望のあった英英辞典を渡しました。面接を受けた生徒たちはプロモルプロム高校に進学することになっていて、7～8キロを自転車通学するようです。大きな轍のある舗装されていない道を通学するのは大変だと思います。

ここにも日本人の寄付で建てられた校舎が1棟ありました（注：同校の旧校舎も1993年KEAFが寄贈）。生徒数は7年生230人、9年生80人です。

支援物資を渡しにソンポン小学校にも行きました。ちょうど午前の授業が終わって元気な児童たちが教室から出てきました。ゴム草履をはいていない子がいるのが気になりました（上の写真）。この生徒数の減少は一部の学年を除いて少ないようです。

午後からはバイクタクシーに乗ってプレイトープ中学校と小学校へ行きました。面接を受けた生徒たちは高校に通うために下宿するようです。生徒数は7年生140人、9年生46人です。支援物資を渡したプレイトープ小学校は1年生155人、6年生110人でした。

雨が降りそうなので急いで引き揚げました。

6日目はプロモルプロム小学校へ支援物資を届けました。プロモルプロム中学・高校へ移動して9年生と10年生を先ず面接しました。その後、今年大学を卒業した元大学奨学生と今秋大学入学を希望している生徒の面接をしました。

（3頁に続く）



(1頁からの続き)

「母校のプロモルプロムで教えたい。ここで勉強して今の私があると思っています。人材を育てることが私の願い。それが達成できれば、この国は発展するでしょう」。希望に燃え、弾む調子で話してくれた。

昨年、プノンペン大学銀行学部を出て、郵政銀行の営業マンとして1年経ったセン・シネット君も来た(向かって右)。朝7時半から夕方4時半が勤務時間だが、残業が多い。1日15件の顧客回りがノルマで、「最初は言葉もでないほどでしたが慣れてきました。昇給もしました。営業成績がよいと割増がでます。生活は安定してきましたが、時間的余裕がないのが悩みです」と仕事一本の毎日を忙しく過ごしている。

資金も調達できない零細農家を対象にしたマイクロフィナンス(小口金融)業界に就職したウーン・ボラン君は国立カンボジア経営大学をこし7月卒業したばかり。プノンペンでの集まりには欠席したが、われわれがプロモルプロム高校で奨学生を面接していると聞いてバイクで会い

に来てくれた。いよいよ社会人となったのがよほど、うれしいのか、終始にこにこと今後の抱負を語ってくれた。

プレイヴェン州の隣のコンポンチャム州の州立医科大学産婦人科・小児科3年生のテ・ナリンさんは、母校プロモルプロムの正門向かいにある郡立病院で3か月の研修中。「楽しい。でも疲れることも」と勉強や実習のもようを紹介してくれた。

プノンペンのホテルで7人、プロモルプロム高校で1人の計8人の元・現奨学生と会ったが、いずれも口々にKEAF奨学金に感謝していることをあらためて強調していた。(池内秀樹)

(2頁からの続き)

午後からは11年生の面接をしました。生徒数は中学7年生206人、9年生140人、高校10年生282人、12年生164人でした。小学生は減っていません。

7日目午前中はタッコー中学・高校で、今年教員養成所に入学する女子生徒の面接をして1年分の奨学金を渡しました。10年生と11年生の面接後9年生の面接をしました。生徒数は中学7年生320人、9年生183人、高校10年生284人、12年生210人でした。今回

訪問した学校の中で唯一女性の校長先生でした。

午後からコンポントウラバイ中学・高校へ移動。休校日のため10年生、11年生は登校した生徒から面接を始めました。今年教員養成所に入学する生徒と現在実習中の学生と面接を行い、奨学金1年分を渡しました。その後9年生の面接をしました。今年度は5人全員が女子生徒でした。生徒数は中学7年生258人、9年生157人、高校10年生486人、12年生164人でした。

8日目プレイヴェン州の州都にあるブレアンドゥン中学・高校へ行きました。支援物資を渡し、11

年生、10年生、9年生の順に面接を行いました。ここの9年生は他の学校と違い家庭の状況が様々でした。

家庭の事情で施設から通学している生徒、父母がプノンペンの建設現場で働いているため祖母とお寺で暮らしている生徒、父母はなく親戚の家で暮らしている生徒、成人して職に就いている兄弟たちと暮らしている生徒も

いました。他の学校の生徒の家庭はほとんどが農家でした。生徒数は中学7年生177人、9年生150人、高校10年生559人、12年生418人でした。

最後にアスペカ(養護施設)に支援物資を届けてプノンペンに向かいました。その夜、ホーチミン経由で翌日成田に戻りました。

今回の訪問でたくさんの生徒たちが奨学金を必要としていることが分かりました。ほぼ全員が必要としているかもしれません。子供たちが小学校、中学校を終えることができない理由は家庭の経済状況によるものだと思います。

今のカンボジアは労働集約型産業(縫製品製造)が稼ぎ手ですが、給与の上昇とともに生産性や競争力が求められ、それに対応するためにも中等・高等教育を受けた人材が必要となってくるのではないのでしょうか。貧困から抜け出すためにも教育は必要です。KEAFにはこれからできるだけ多くの生徒に奨学金を渡し、生徒たちに学校を続けさせてほしいと思います。教育は効果が出るのに時間がかかります。(写真はバンティチャクライ中学校庭での面接)。

(村田知寿子)



家族のため工場に働きに行く

止められない奨学生の中退 先生も悩んでいます

池内 秀樹

秋の新学期に高校に進学する中学3年生（日本の学制と同じだが、カンボジアでは9年生という）50人への奨学金支給のための面接、奨学金をすでに受けている高校1、2年生（10、11年生）110人の面接を主な目的として6月11日から19日までの9日間、首都プノンペン経由で、ベトナム国境に接するプレイベン州のKEAF支援対象校（高校4校、中学5校、小学4校）と1養護施設を訪問してきました。高校に進学する生徒への奨学金支給は、昨年より8人減らさざるを得ませんでしたし、大学生への奨学金は年額500ドルから400ドルへの引き下げという、財政上の厳しさを反映した訪問となりました。

今回はいつもの岡宮喜雄さんと私に、2月のKEAFシニアツアーに参加してカンボジアに関心を持たれた村田知寿子さんが加わって3人の旅行となりました。村田さんが日を追う形で、日記風に感想を寄せてくれましたので、訪問の様子はそちらをご覧ください、ここでは今回、気が付いたり、学校側から要望されたりした点に焦点をあてて紹介してみたいと思います。

◇まだまだ教科書が足りない

バンテチャクライ中学校での面接（6月15日）が一段落したあと、新しい校舎での生物の授業を参観する機会がありました。そこですぐ気が付いたのは40人ほどのクラスで教科書を持っている生徒はほんのわずかだったということです。そのため、教科書を持っている数少ない生徒のひとりが立ち上がって同級生たちにテキストを読み上げ、先生が白板を使って講義していました（写真）。

義務教育の中学校には、本来、国が無償で教科書を配布する建前になっているのですが…。一時期、支援校からは教科書が足りないという切実な要望が集中したため、KEAFはプノンペン市内の教科書の印刷所を訪ね、まとめて注文して毎年、届けてきました。支援した教科書はこれまでに計1万冊以上にのぼり、少な

くても何人かに1冊は行き渡ったのではないかと感じることもありました。事実、学校側からの要請も一昨年あたりから減ってきたので、教科書支援は一区切りついたようだとは判断したのですが、実はまだまだ、十分ではない現状の一端を垣間見るようになりました。

◇奨学金制度の問題点、浮き彫りに

KEAF奨学金を受け取る生徒には、高校生活の3年間をやり通してほしい、とわれわれは願っていますが、相変わらず、中退者が少なからず出るという現状があります。このため、KEAF側からは毎回のよう

に、面接では「卒業まで、勉強を頑張ってください」と奨学生には希望を伝え、学校側にも、選考にあたってできれば「卒業まで頑張れる生徒を」と要望してきたのですが、今回2校から「高校を中退しないということを条件のようにしてしまうと、最貧家庭の生徒は推薦しにくい」という指摘がありました。そうすると、経済的に本当に困っている生徒を当初から切り捨てざるをえないことになり、それでは奨学金を出す本来の趣旨にそぐわないのではないかと。かといって中退されてしまうのも困る。難しい問題に直面することになりました。

◇施設の生徒に奨学金を

州都プレイベンのプレアン

ドゥン高校はパソコン専用の

教室を備えて充実した環境にあり、生徒も農家だけではなく、公務員や店舗経営など他校にくらべ恵まれているという感想を持っていましたが、最貧家庭の子弟を集めた施設、障害児施設などがいくつか同校周辺にあり、そこから通ってきている生徒がいることが、今回、分かりました。同校の副校長がそういう施設の管理・運営を任されていると明らかにし、「施設のこどもにも奨学金を出せないだろうか」というのです。これらの施設から同校の生徒として勉強している子や、補習授業だけを受けている子もいて、生徒の何人かはこれまでもKEAFから奨学金を受けていたのだそうです。出身がどこであろうとプレアンドゥン高校生徒であれば、支援対象校だから問題はないとしても、施設から同校に通う生徒への奨学金対象人数を増やすとなると、KEAFの財政上の問題から簡単に答えは出せない。「東京に戻ってから検討してみます」としか答えようがありませんでした。



ありがとうございました

(2016年6月1日～8月26日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます（敬称略させていただきます）

(神奈川) (東京) (東京) (東京) (東京) (神奈川) (千葉)
(東京) (東京) (千葉) (東京) (東京) (東京) (神奈川) (東
京) (神奈川) (埼玉) (千葉) (東京) (東京) (群馬) (東京)
(千葉) (大阪) (ドイツ) (大阪) (東京) (千葉) (神奈川) (東
京) (東京) (熊本) (大阪) (神奈川)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

※写真つき奨学生紹介の5、6、7、8、9頁は個人情報保護のため省略

◇物品の支援ありがとうございました

(東京)：デジカメ2台、ノート、ルーズリーフ、トートバッグ、クレヨン、ホチキス、コンパス、メモ帖、手鏡など ▽ (東京)：デジカメ、ホチキスと針、シャープペン、ノート10冊、クレヨン、黒ヤッケ、トートバッグ多数、文房具セットなど ▽ (東京)：ザック、ボールペンなど ▽ (東京)：デジカメ。

《カンボジア・ベトナム8日間の旅》に参加しませんか

歴史と文化、民族の悲劇と希望に触れ

豊かな自然と美味しい料理を楽しむ

KEAF 支援の貧しい農村を訪ねる

2月のカンボジア・ベトナム・シニアツアーは参加者に「いい旅だった」と喜んで頂き、話を聞き知った人たちからは「次のツアー計画はないのか」との問い合わせも寄せられています。2017年もツアーを計画しました。多数のみなさんに参加していただきたいと思います。旅程や経費の概要は下記のとおりです。

9月から全日空（ANA）の直行便がプノンペンに入ることになりました。これによってバンコク、ホーチミン、ハノイ経由だったカンボジア行きの旅程が楽になり、訪問先のオプションが広がりました。

前回の日程を踏襲するのではなく、より良いツアーになるよう旅行社と相談して立案中です。次号の会報81号の発行は12月上旬になります。近々、詳しい旅程が決まり次第、ホームページを通してお知らせします。参加（または参加希望）の申し込みをされた方には直接連絡します。

（日程）2017年1月15日（日）～23日（月）間の6泊＋機中泊1、ないし7泊の8日間。1月下旬から2月はじめのテト正月の混雑期をさける。乾季

（10～3月）の最も過ごしやすい時期。

（訪問先）▽シエムレアップ：アンコールワットなどの遺跡群訪問、伝統の宮廷ダンス鑑賞。

▽プノンペン：王宮、博物館、カンボジア戦取材中に亡くなった国際ジャーナリスト慰霊碑など。KEAFが支援するプレイヴェン州農村を訪ねて子どもや先生たちと交流。

▽ホーチミン：ベトナム戦争終結の舞台となった旧大統領官邸、戦争博物館、ドンコイ通りのショッピング。戦争中、米B52爆撃機のじゅうたん爆撃を

耐え抜いたゲリラの地下トンネル基地にも。

▽ハノイ：エネルギーあふれる中央マーケット、戦争博物館、ホーチミン廟、世界遺産ハロン湾など。

（ガイド）全行程に日本語ガイドがつくほか、ベトナム、カンボジア戦争を現地取材した KEAF 会長・金子敦郎が案内役を務めます。

（経費）23～24万円（2人1部屋、1人部屋は追加料金）

（申込先）KEAF 事務局

info@keaf-japan.com

03-3418-7003（金子敦郎）

att-akanek@gol.com（同）

（締切）12月15日（木）。参加者のリスト（名前、住所、電話番号）を日通旅行社に提出、渡航手続きを進めてもらう。（写真：プロモルプロム高校を訪問、KEAF 奨学生と交流。2月シニアツアーで）

